

Stokes/Park 1<sup>st</sup>

「BRIDGE × WORD」

作 白鳥雄介

北海道胆振地方、日本海側田舎町に、住む奥本涼子は、小説家を目指しているものの、厳格な父親一人に育てられた環境から、そのことを言い出せずにいた。

父親の祐志は、地元であるこの町で、橋の設計や点検の主に下請けをしている。祐志もまた、経済的な理由や担い手不足から涼子が家を出ることを嫌っている風であった。

ある日、祐志が抱えている最後の従業員、栗男が突然、上京してしまう。時を同じくして、涼子はウェブ応募の小説コンテストにて、編集者の目に止まり、編集者が家まで来てくれることになった。上京し、小説家の道を歩みたい涼子の前に、自身が書いた小説に登場するキャラが現れ、背中を押してくれる。涼子は祐志を説得しようとするが、祐志は突っぱねて、いつものように新聞を読み出す。……のだが。

そのとき、祐志は、失語症の一種「ワードホリック」という病の疑いが持たれ、東京のリハビリ施設へと移動することになってしまう。父親の長期リハビリで、思いもよらず状況を果たす涼子は、父親を心配しつつ、小説家としての一步を踏み出していく。ワードホリックという、脳内から言葉や概念がアトランダムに消えていく奇病にかかった祐志は、ますます涼子との関係に背を向けてしまう。

父親の病気が進行すればするほど、順調な小説家としての道を進んで行くことになる涼子。実は、連載している小説のラストは、祐志が設計していた小さな橋が登場<sup>2</sup>する。父親に読んでもらいたい気持ちを取りハビリ施設の明るい患者たちが、助けてくれ、涼子の小説は父親がまだ理解できる言葉を並べていく。言葉の並びが、不可思議になっていくことでますます売れていく小説。だが、祐志の病気の進行は早く、小説の文字を追うことはもはや難しかった。

そんな折、編集者の軽犯罪がネットで炎上することになり、煽りを受けた涼子の小説は連載ストップ、内容へのバッシングも始まる。挫折しかける涼子の背中を押すのは、もう言葉を失った父親の言葉だった。脳内に余った言葉をつないで、父親が自身の境遇と娘の夢にようやく向き合い始めた。

【配役】

奥本涼子

奥本祐志

石井栗男

矢野

花ちゃん

挿絵

挿絵2

山口

坂田

ミキ

三宅

研究員

語り

小説の中に登場する男性

やんちゃ

記者

■ MOアップ。

客電が落ちていく。

ここは、涼子の父親、奥本祐志の自宅兼事務所である。  
本日で部下をやめる決意をした意思の固い男、石井栗男と  
それを追いかける形で、祐志が入ってくる。

栗男はギターを持っている。

祐志 ちよ、待て待て待て待て！栗男！

栗男 いやーおやつさんー、申し訳ないっす！

祐志 待て待て待て！待てっす！

栗男 あのーおやつさんの気持ちはもっすごい理解してるつもりなんすけど、  
自分にも自分つてもものがあるんで。さーせん！！

祐志 なんだよ、それ！いいから待て！栗男！落ち着け！

栗男 ごめんさい！俺、ほんつと、東京で一旗上げてえって思ったんすよ！

バンドマンになるって決めたんすよ！

祐志 うん、その辺のこともちゃんと話聞くから

涼子 お父さん、あのね。

■ 涼子が入ってくる。

■ 祐志は、栗男の腕をキメている。

栗男 ちよ、おやつさんわかってくださいよ

祐志 わかんねえよ！仕舞いには折るぞ！

栗男 は！？あーあー折ってくださいよ！折ってくれてなもんすよ！  
でもね！ギターを弾くその腕が折れても！俺の心は、折れないですよお！

■ うまいこと言い「かけた」ところで、祐志がもう一度腕をキメる。

栗男 イテテテテテテ！

祐志 ギター！？なんだそれ

栗男 あーあーあーわっかりました！わっかりましたー！

おやつさんね、さっきから使ってるその「コラ！」って、

なんでコラ！っていうか知ってます？

祐志 なんの話だよ！

栗男 「コラ！」ってね、元々「これ」だったんですよ！それが訛ったの。つまりね、近くにあるものを指す言葉なんすよ、それを明治に入って、警察官がみんな使い出したんですって、「コラ、待て、こら、待てー！」って。近くの人を指せる、しかも威圧できる便利な言葉になったんですって……。

■ 栗男はウンチク（日替わり）を言うと、逃げる。  
お客さんはおもわず感心する。

祐志 だからなんだよ！！

栗男 俺は、東京でバンドマンになるって決めたんすよ！

祐志 うん、それはわかったって言ってんだろ。

栗男 （曲前の語りのな）俺は、なんか小さくまとまっていた。

この〜小せえ田舎の街で。

おやつさんのただ言う通りに橋の点検、橋の点検、働くだけの毎日。

祐志 今はまだそうかもしれないけど、ゆくゆくは栗男も設計とかもつと

できるようになるんだぞ！ほら、もうすぐ作り始める橋だって、

一緒に完成させたいって

栗男 そんな〜働くだけの毎日の中で思いつきました、聞いてやってください、

石井栗男で（ギターを4回ノック）

祐志 何歌おうとしてんだよ！

栗男 放せよ！俺が昨日見たものは、間違えなく本物だった！俺が目を見た、

耳で聞いたもので見たもの、いや、心で聴いたもの……心で見たもの

……感じたもの。

祐志 定めておけよ

栗男 全部が俺の心を突き動かした！社会に縛られるのなんてもうまっぴら

ゴンゴンのゴンちゃんです。

俺は俺の道を突き進む、俺もあんなサウンドで人の心を……（感きわまる）

聞いてやってください、石井栗男で（ギターを4回ノックする）

祐志 ああ〜もう！どこでノックしてんだよ！！！！

栗男 え？

祐志 どこでトントントントンしてんだって！

栗男 なんすか！

祐志 間違ってたんだよ！

■ SE ピンポン（チャイム、正解に聞こえる）

栗男 合ってるじゃないですか！？  
祐志 間違ってるつつてんだよ！  
涼子 お父さん、あのね  
栗男 何がですか！？  
祐志 お前じゃあ、いいよ、歌ってみろ！歌い出してみろ！  
栗男 いいんすか！？  
祐志 いいよ。  
栗男 聞いてやってください！石井栗男で（ギターを4回ノック）  
「うちの作業所で、思ったこと」  
ワン、あ、ツー、あ、ワンツースリーフォー（ギターを4回ノック）  
祐志 もういいよ！  
栗男 なんすか？  
祐志 わかんない！！？

■ S E ピンポン

栗男 はい！  
祐志 はいじゃないよ。  
涼子 お父さん、あのね、今日、紹介したい人が  
祐志 紹介？ああ、あとでな。説明が難しいなあ。全部間違ってるよ。  
トントンの後にタイトルは言わない、ワンツースリーフォートントントン  
つて。  
栗男 あ、ワーン、あ、ツー！  
祐志 それもそれも！  
栗男 なんすか？  
祐志 昨日の今日のやつが、ワンとかツーとか言う前に、あ、っていうのやめれ、  
歌うの初めてなんだから！  
栗男 むっっ給料がやつすいっ  
祐志 なんだその歌詞！  
栗男 休憩あと30分ほっしいっっ  
祐志 続きを歌うんじゃない！  
祐志 なんだよ、その歌。  
うちのじゃねよ、どこのだよ。  
給料よりもっと否定するところ、見つけて歌えよ！  
栗男 これは社会への叫びっす。

■ S E ピンポン

祐志 もう誰だよ、朝から！

涼子 あいてますー！！

栗男 おやつさんには本当ごめんなんすけど、俺自分に嘘つけないっす！

というわけで、涼子、悪いな！俺の方が先に東京行っちゃうわ！

祐志 え！？

■ 栗男は走り去っていく。声がする。

祐志は作業着へ着替える。

栗男 華の都！待ってるー！ーい！

祐志 (息も絶え絶え) ……もうなんなんだよ、あいつ。

涼子 あ、うん、お父さん、今日、紹介

祐志 朝から、いきなり、お世話になりましたーじゃないよ。

ミュー、なんだ？なんだか知らないが。仕事どうすんだよ！

■ 栗男が別エリアにギターを持って登場。歌う。

遅れて工場長の子ども、花ちゃんが入ってくる。

矢野 あのー娘さんをお願いにきましたとかじゃないですよ。

祐志 そうなの？

栗男 聞いてやってください、石井栗男の新曲です、「最近の疑問」

涼子 お父さん、

矢野 あのー娘さん、涼子さん、うちで出してる新人文学賞に応募されて。

祐志 ぶ、文学賞？

栗男 駅ビルに良くあるー♪意味わからない言葉ー夜ランチって何ー♪

矢野 あのーWEBから応募できるものなんですけど、そちら応募いただきまして。

それで大賞とかではないんですけど、そのー筋が良さそうかなあと

思いました。連絡とりまして、お会いしたところー

栗男 チェーンのお蕎麦屋さんにあるーよくわからないトッピングー

一つだけ天ぷらじゃない揚げ物ーコロツケー

祐志 え、涼子？

涼子 あの、いや、

祐志 え、え、え、え……いつ？

矢野 あのー先週ですね、都内で。

祐志 都内？！都内って！

矢野 新宿で。はい、まあご成人されてるので、はい。

栗男 これは疑問じゃないけど、荷造りしてないーって出発前日に忙しい  
アピールする女子は、計画性ないだけ！

あとモロヘイヤって名前なんか怖い！

花 (遮って) 栗男くん！

栗男 あ、花ちゃん！

花 行くの？

栗男 おう！このあとのバスで。

花 本当に行くの？

栗男 花ちゃんは、残るの？

花 当たり前じゃない。別にやりたいこととかないし、工場で働いてるんだから。  
栗男 お父さんの会社と工場、すごいもんね。俺もおやっさんも、花ちゃんの

お父さんがいなかったら。

花 でも、涼子のお父さんしか、この辺の橋の点検任せられないって。

栗男 俺は？

花 特には。

栗男 サンキューです！

■SE バスが来る。ドアが開く。スルーして発車。

栗男 涼子はどうすんのかな。

花 出にくくなるんじゃない？

栗男 責めてる？

花 別に。

栗男 あ、仕事？

花 うん、明日から向かい町の橋の点検だから、書類、涼子の家に。

栗男 うん、じゃあ、俺行くわ！

花 バス、今、行っちゃったよ。

■照明フェードアウト。栗男、捌けていく。

祐志 それで？

矢野 あのーそれで、うちで書いてみるっていう方向で……

祐志 うちで？  
矢野 東京で、  
祐志 え!!!??  
矢野 え、本当に何もご存知ないですか？

■ 矢野は、涼子の小説のコピーを祐志に渡す。

矢野 お娘さんがおうちに送ってきたもので、そのおコピーです。  
祐志 お小説？  
涼子 あ、お父さん  
祐志 いやいや、それは本当に、今はダメだよ。  
矢野 あれ？ですが、お涼子さんすごく  
祐志 あ、いや、やりたいことはわかるんですけどね、今すぐに辞められちゃうと。たった今、朝一で従業員がとつもなくセンサーショナルに辞めてね。  
仕事の目処が立たない状態で。更についていうのは。  
矢野 あれ、ぜんっぜんお話通ってないけど  
涼子 いや、それは。  
祐志 一応、今、うちのお事務やってんのが、涼子なもんで。  
矢野 ですが、お娘さんはお東京で、お勝負させてあげましょうよ！  
祐志 それに、私、今日の今日まで知らなくて。  
涼子 お父さん、行きたいの。

■ 間。

祐志 うん、そうだな、そんないきなり言われてもな。  
栗男が朝いきなり辞めますって言って、何も便乗しなくても。  
涼子 栗男くんが今朝、突然すぎて、私も知らなかった。  
でも、便乗じゃなくて、言えなかった、けど、ずっと考えてて。  
祐志 なら、何で今日の今日まで言ってこなかったんだよ。  
涼子 まず矢野さんと会ってからかなとか、電話だけだったし、いろいろあったの。  
祐志 お父さんにも先に言えばいいだろ。  
涼子 そうしたらせめて次の人、入ってくるまでは待つてもらって、もう入ってこないじゃん!……こんな小さい橋の設計?点検?  
の個人事務所? 誰も入ってこないよ。田舎なんだから。  
祐志 そう、人がいないから、辞められたら、尚更、お父さん困っちゃうだろ。  
涼子 お父さんも困るけど、私だって!

大体、橋の点検の下請けばかりで。潰れかけじゃない！！

祐志 涼子、それは言っちゃダメだろ！

涼子 何が！

祐志 俺だって、この歳になってもこう、いろいろと頑張りたいというか、橋の設計だって、役場と工場にはやらせてくれて話してて、もうすぐ通るんだぞ！？

できたらお父さんにとっては一大事業だし、もうこの辺りすごいことになるかもなんだぞ。

観光客はくるわ、お金は動くわで。川があつてさあ、工場夜景をさあ、水面に夜景の光がパーッと写ってさあ。

涼子 そんな、いつ実現するかもわからない話じゃん。

祐志 ほら？知らないだろもう動き出したよ、お父さんが作るんだぞ！突然東京行きたいですは、ルール違反だろ。

涼子 ルールとかないもん。

祐志 涼子なんかよりもなあ！ほら！工場長の娘のほら、

涼子 花ちゃん？

祐志 あの子の方が、よっぽどまじめに町のこと考えて仕事してるよ。

■工場長の娘、花ちゃんが別エリアに出てくる。

花 パパ、蛇口ひねったらコーラ出るようにして。

あと、家の中に薬局とATM作って。

あとバスターミナルとかにある、焼きおにぎりとかフライドチキンの自動販売機、部屋にほしい。そしたら仕事する！

祐志 まじめだろ！

涼子 どこが！

祐志 お金持ちっただけで仕事は真面目にしてるだろ！？

花ちゃんの口利きとかもさあ。今いなくなれたらさあ。

涼子 そんなの自分の都合でしよう！

祐志 でもせめて準備とか、先に言っておくこととかあるだろって！

涼子 それが言えない状況だったでしょ！

矢野 二人とも落ち着いてください！

二人 部外者は黙ってて！

■そこへ、ヘラヘラした挿絵が現れる。

挿絵 うす！  
涼子 誰だよ！？  
祐志 何が！？  
挿絵 ウィッスー！！  
涼子 だだだだだ、誰よ！  
祐志 だから何が！涼子？！  
矢野 涼子ちゃん？  
挿絵 挿絵のサシエとく申します。  
涼子 挿絵？  
祐志 おい、何だ！？  
挿絵 挿絵です、ほら、（小説原稿を指差して）それの。  
涼子 え、何、どゆこと！？  
祐志 涼子？  
挿絵 それ、読んでもらいなよ！？  
涼子 挿絵がいる。  
矢野 挿絵？  
涼子 挿絵がいる！挿絵がここに！  
祐志 わかるように説明しなさい！  
挿絵 東京行きたい？  
涼子 東京行きたい  
挿絵 小説書きたい？  
涼子 書きたい  
挿絵 その想い（自分を指差す）  
涼子 なんで挿絵が？

■涼子と、挿絵は小説書きたい？書きたい！を繰り返す。

祐志 いや、全然わかんないから！  
矢野 挿絵だあ。涼子ちゃん見えちゃってんだ。涼子ちゃん、東京行こう！  
祐志 何言い出すんですか！？  
矢野 あの有名な先生は見えるっていうんですよ！  
祐志 何！？  
矢野 有名な先生たちはね、ヒット作出す前に小説の挿絵が現れるっていうんですよ。  
矢野 信じてください！僕も一応、プロです！  
挿絵 よし、行こう！  
涼子・祐志 ちよつと待って！！！！いやいやいや！今じゃないでしょ！

挿絵・矢野 は？

涼子・祐志 どう考えても今じゃないでしょ！？

矢野 いや、今だよ！今行くんじゃないの！？

挿絵 はい？

矢野 どう考えても今でしょ！！

祐志 ほほほ、ほら、本人が行くのは今じゃないって！！

涼子 確かに！！想い強まってるけど！出てくんの今じゃねえって！

二人 出てくんの！！？

挿絵 いや、あのタイミングとかはこっちで決められないっていうか。

そこはオートで出てきちゃうというか。

祐志 涼子、さっきから誰とどうした？！

涼子 挿絵だって！

祐志 挿絵ってなんだ！？

涼子 んーほら！今、出てきちゃったら、説明難しくなるでしょ！？どうすんの！？

■ 挿絵に押し出される形で、涼子は、矢野の元へ。

矢野が持っている原稿封筒を手にする。

涼子・挿絵 これ読んで！！

祐志 何？

涼子・挿絵 いいから！これ読んでよ！！

祐志 涼子、落ち着きなさい！頭がおかしくなったか！？。

涼子・挿絵 おかしくない！これ読んで、面白くなかったら行かないし、

ここで働くから！

矢野 涼子ちゃん（泣）

涼子 私こんなところで一生過ごす気なんてないの！

祐志 おま、こんなわけのわからないやつ連れてきて、わけのわからないこと

言って、東京なんて行かせられないだろ！

涼子 お願い！言わなかったのはあれだけど、

私はもうここを出て行きたいの！お父さんと仕事に縛られたくない

花 （入ってきて）涼子！おやつさーん！

祐志 ダメダメダメダメ！

■ 間。 静寂。

祐志 今日はもう仕事は休んでいいから。あなたも帰ってください。

■ 原稿用紙を受け取らず、近くにあった、新聞を手に取り、広げた瞬間。

映像「突如として文字が大量にこぼれ落ちる」

SE ジャラジャラジャラジャラー！！！！！！

■ OP タイトル、役者紹介。

■ 療養施設。職員と思しき山口と、祐志がいる。

祐志は、作業着から館内着に着替えている。

山口 なので、認知症、アルツハイマーなどは区別されたものになりますかね。

単純に語彙力が低下するとうか、物忘れのすごく強いものとうか。

祐志 はい、ただの物忘れだと思っただけですね。

山口 ああ、でも新聞の記事に書いてある？「遊園地」って言葉が

何かわからなかったんですね？

祐志 え、はい、遊園地？

山口 ほら、ジェットコースターとか、観覧車とか。

祐志 ああ、ジェットコースター、観覧車。

山口 それがある場所が、遊園地。

祐志 はあ。

山口 あとお、「深海」も。

祐志 ええ、漢字を見て「海」はさすがにわかりますよ。でも、

山口 でも「深い」っていう言葉が見てもわからなかったんですもんね？

祐志 ファイ？不快な思いとかそういうのですか？

山口 そっちはじゃなくて、形容詞の、深い。

祐志 ……。

山口 そうやって、言葉の意味がまるっきり分からなくなっちゃうのが、

この病気のなんていうんですかね、怖いところですねえ。

■ 場面がクロスで変わる。療養施設で暮らす患者と思しき

坂田、ミキがいる。

坂田 ああ〜どうぞどうぞどうぞどうぞ！

祐志 すみません、滞在費って？

坂田 大罪？いや、そんな罪犯してここにいるわけじゃないんだよ。

祐志 ああ、あの～暮らすに当たつての月々のお金は？  
ミキ ああ～0円、聞いてない？  
祐志 あれよあれよとここにきたので  
坂田 何があつたの？？  
ミキ ちよ、いきなり。気使いなよ。  
坂田 いやあ、もうここにきたら我々……  
祐志 あの～  
ミキ え～  
祐志 話したくなかつたら話さなくていいからね。  
祐志 あの～新聞を読んできました。  
坂田 ありや～、新聞ですか！私はあれでした。あれ、あの～はい、あれでした。  
祐志 どれですか。  
坂田 あの～説明書って書いてある冊子なんでしたっけ？  
祐志 説明書じゃないですか！  
坂田 あ、説明書です。  
ミキ いや、大丈夫かよ！  
祐志 私は新聞で！いきなり全然わからない言葉が出てくるんですよ。  
坂田 そうそうそうそうそうそう  
祐志 で、娘に聞くと  
坂田 とぼけた顔されちゃつて。  
祐志 と、ボケた？  
坂田 とぼけた顔  
祐志 とぼけた顔  
祐志 ん？  
坂田 んああ、そのは？みたいな顔してきて。  
祐志 そうです！  
坂田 何でこんな言葉もわからないのよ！つて。  
祐志 そうです！  
坂田 どうしちやつたの！何かおかしいよつて！  
祐志 そうです！で、居合わせた娘のお友達に言われて  
坂田 検査受けさせられて！  
祐志 はい。  
坂田 ん～お辛いですなあ。気持ちはわかりますよ、僕もそのミキ姉さんも  
一緒ですから。  
ミキ 一緒にしないで。  
祐志 あ、よろしくお願い致します。  
ミキ まあ、ここの生活、楽だからいいよお笑 深いこと考えなくていいし。

祐志 ふ、深い？というのは

ミキ ん？深い。

坂田 ああ、もうね、もうね、ここは働きたくない人にとっての楽園です。楽園だけに。

祐志 え？

ミキ とりあえず、まだよくわかってない病気なわけだし、こうやって日常生活に何ら支障もないし、検査に協力して、ちよつと長めの休みもらったって思っていればいいんじゃない？

■ミキ、捌けていく。

祐志 そうですよね。

坂田 ミキ姉さんも結構もうきちやってるんで、たまにおかしなこと言いますから。

祐志 はあ

坂田 わからないことは、山口さんを頼ってください。

祐志 山口さん？

坂田 ああ、あのほら、ここにきた時に玄関先で迎えられた背高くて、綺麗な

祐志 ああ

■涼子、花、山口、矢野、挿絵がいる。

立って話をしている。

涼子 ワード・ホリック（袖声）

山口 そうですね。

涼子 はあ。

山口 まあ、言葉がスッコーンって頭から抜けちゃうんですけど、詳しいことはまだ研究段階というか。私たちもなんとも言えなくて。

ここに住み込みで入っていたら、経過観察だけして、症状の進行とかを見させていただく形になります。

花 涼子。

涼子 ああ、それはよろしくお願い致します。

山口 早めにわかってよかったですね。

涼子 はあ

山口 いや、もうぜんっぜん言葉わかんなくなってるから、って方も中には。

涼子 はあ。

山口 とりあえず、もう祐志さん、他の方とも会ってると思います。

ここでの生活は全面サポートしますので、安心してください。

■ 山口捌けていく。

涼子 花ちゃん、ありがとね。

花 いや／＼なんもなんも。こんな施設あるんだね。

涼子 ね、検査施設？ってこと？

花 まあ、その分お金とか全然気にしないでいいみたいだし

涼子 でも、お父さんの仕事どうしよう。

花 パパに言ったら、とりあえず落ち着くまではいいよって。

涼子 ごめんね。

花 なんか最近の病気で、増えてきてるけど、まだよくわからないんだって。

涼子 うん。

花 涼子どうするの？

涼子 私？お父さん仕事できなくなっちゃうと、

自然というか、私もやれることなくなっちゃうから、このまま残ろうかなって。

お父さん一人じゃ可哀想だし。

花 それがいいかもね。死ぬとかそういうんじゃないし、良かったんでない？。

涼子 あ、あのさ、お父さん、復帰したらちゃんと仕事あるかな？

花 それはあるんじゃない？私が何とかするし。あ、何かそういうえば、

久々に橋の設計図広げて、パパとこの前話してたから、

今度、久々に観光用の？橋作るんだって。

涼子 いや、その話、ここ来る直前に、聞いてさあ。

花 え？あの日？

涼子 そう、私全然知らなくて。

花 え／＼おやつさんのアイデアだよ。

涼子 へえ

花 まあ、そのこともパパがもうドンドン進めていくから心配しなくていいよ。

したっけ、花もう帰るわ。

涼子 忙しいのにごめんね。

■ 花ちゃんは、実家のある田舎へ帰って行く。

矢野 まあ、望んでる形とはちょっと違ったけど、東京来れちゃったね。

涼子 ……そうですね。

挿絵 そうなんです。



挿絵 全く問題ないじゃん！小説家デビューへの土台揃ってんじゃん！  
涼子 え、私、いいのかな？  
挿絵 いいに決まってるじゃん！何を迷うことがあるの？

まず問題だったお父さんが近くにいる。しかも別に面倒見なくていい！  
金かからねえ！

矢野さんは近くにいる！出版社近い！直接やりとりできる！

いいことしか今のところないじゃん！

涼子 そうだけど！

挿絵 素直に喜びなさいよ！来たかったところに「理由があつて」来れてるんだから。

涼子 まあ。

挿絵 別にそう思うことは性格悪くないよ。

涼子 そうかな。

挿絵 ご飯ご馳走してもらって、財布見せておきながら、いやいやいいです、

出しますーとか言いながら払ってもらったらありがたうございますー

よっしゃーってみんな思うんだから。

涼子 うん

挿絵 理由があるってすっごく楽なんだよ！

今はこの状況をフル活用して、やりたいことに励む！そういう歳じゃん！

涼子 まあ、そうね。いや、そうなんだけど、えええええーいや、いいのかな？

挿絵 なまら顔ほころんでるやないか！

涼子 え？

挿絵 なんまら顔ほころばせてるやないんやないんやないかい！！

涼子 ドウフフフ

挿絵 笑い方キメー！

涼子 いや、待って！いやいやいやいや、えー！え、嬉しいんだけどさ！

挿絵 だけど、何さ！

■ 新しい、挿絵が登場。

挿絵2 お疲れ様ですー！

挿絵 ウエイ！

涼子 え、誰！？

挿絵 誰じゃないじゃん！

涼子 何！？

挿絵 あんたとことんだな！

涼子 は！？

挿絵 お疲れ様ですー

挿絵2 お疲れ様ですー！

挿絵 私がしゃべってるってことは！????

涼子 私の小説の挿絵！

挿絵2 サシコです！

涼子 サシコ！

挿絵 私は、サシエ。

二人 二人合わせて！あなたの小説の、挿絵！

涼子 私の小説の挿絵。

挿絵 まあ小説の中に出てくる「私」っていうのが、私。

で妹っていうのが、サシコ。

涼子 何それ。

挿絵 いや、あんたが出しちやっただからね。想いが、膨らんで！

涼子 え？

挿絵 だから、あんだけさあ、嬉しいんだけどー、いやー、いいのかなーとか散々

言ってたけど、結論！嬉しい！楽しい！大好き！書きたい！結果が！

挿絵2 サシコです。

挿絵 2体目！

涼子 お父さん、病気なんだよ。

挿絵 そう！病気なのよね、心配なのよね。でもそれ以上に東京に来て嬉しい。

小説を書く環境が揃っちゃってるーが上回っちゃってんのよ。

その結果が

挿絵2 サシコです。どうぞ、よろしくお願いします！

挿絵 レッツ！ライティング！

涼子 いや、私のイメージと違う！！

■挿絵、固まる。

涼子 嬉しいんだけど、そのイメージと違う。二人とも。

挿絵 え？

涼子 背小さい、あとパツとしない！

挿絵2 へ？

涼子 私の話に出てくる、姉妹とはちよつと違うというか。

挿絵 ぬあ

涼子 あのね、

挿絵 皆まで言わなくてもわかってます。姉妹、しかも生まれつき魚の

エラみたいなのが耳の後ろについてる姉妹でしょ。

挿絵2 で、妹の私が、学校でそのエラが見つかって、海の中へ逃げ込んで、二人孤独にも力強く生きていく。

挿絵 私には面倒見の良い姉。

挿絵2 私は、いじめられて、海へ逃げて孤独を選んだ、か弱き妹。

涼子 っで感じじゃないじゃん。

二人 ん？

涼子 キャラが全然違うじゃんか！

挿絵2 それは仕方ないじゃん。いないんだから！

涼子 何それ！

挿絵 サシコ、秘密をバラすの？

挿絵2 いいよ、言った方が。あのね！新人さんでしょ！

涼子 ん？

挿絵2 あのね、本来ね！こうやって挿絵が現れるのは、

上の人にしかないことだから！

涼子 なにそれ！

挿絵2 そんなねえ、背が高いだの、かっこいいだの、ジャーニーズだかトミーズ

だかの美男美女は、上の先生にならないと付かないの！我々は

そういうサービスなの！

挿絵 確かに！こうやって私たちが出てくること自体、すごいことなんだからね！

涼子 え？そうなの？

挿絵 そこらへんはありがたく思っていただけだったのは確か。

挿絵2 これはチャンスです！

涼子 チャンス！？

挿絵2 そう！1体のみならず、2体も出ることは非常に、チャンスです！

涼子 本当にいいのかな？

挿絵 書くべきときに書く！

涼子 書くべきときに書く。

挿絵 そう！書きたいところで書く。

涼子 書きたいところ。

■ 入れ替わりで、祐志、ミキ、坂田。

ミキ プリン！

祐志 プリン？

坂田 いや、これはまずいですよ！

祐志 プリンってなんですか？  
ミキ えっとね、プリン！  
坂田 わかりません、プリン？  
祐志 いやー聞いたことないですねえ。  
坂田 いやー嘘つかないでくださいよ。  
ミキ いやーこれはしょうがないよ、ワードホリックなんだから。  
祐志 響きから想像するのも難しいですね。  
ミキ じゃあじゃあ（スマホを見せる）

■ プリンの画像を見る3人。映像「プリン」

坂田 これが、プリン。  
祐志 スライム的なやつですか？  
ミキ いや、違うよ  
坂田 なんだろ、ゼリーの一種？  
祐志 ぜ、ゼリー？  
ミキ え、嘘でしょ？ゼリーわかんない！？  
坂田 ゼリー！ほら、プルプルの！プルツプルの！  
ミキ あのー、そうプルプルの！  
祐志 ヒントが少ないです！  
坂田 いや、ゼリーとかプリンなんて、もうプルプルが最大のヒントなんですよ！  
祐志 ゼリー？プリン？  
ミキ これは大きいよ、プリンとゼリーわかんなくなっちゃったのはかなりでかいよ。  
祐志 プリン？ゼリー？  
ミキ 【プリン】牛乳、卵、砂糖を合わせて蒸し焼きにしたもの。  
カスタードプリン！  
祐志 あ、カスタード！ぷ、プリン？  
ミキ ダメだ、プリンに代わる言葉がプリンにはない！  
坂田 あ、プリンの変義語、プディング。  
祐志 ぷ、プディング？  
坂田 あゝ祐志さんの頭の中の辞書から、プリンが消えてるゝ。  
祐志 プリン、ちよつと食べさせてください！

■ 年上の患者、三宅が入ってくる。

坂田 ああ、三宅さん！

三宅 あら！新しい方？  
坂田 そうそうそう！新しい方！  
祐志 新人の奥本祐志です。  
三宅 いや、ダンディ！  
祐志 ダンディ？  
三宅 ダンディわからない！  
ミキ 男らしい！  
三宅 それ！男らしくてかっこいい！  
祐志 いや、ダンディですかね？  
三宅 あ、ダンディはわかってます。  
祐志 わかってますよ。  
三宅 ああ、そう！もう誰がどの言葉知らないのか、  
もういつもおっかなびっくりで。  
祐志 ああ  
三宅 忘れちゃうともう全然思い出せなくなっちゃうでしょ？  
祐志 さっきは  
坂田 プリンがもうわかんないって。  
三宅 え、プリンわかんない？  
祐志 のようです。  
三宅 怖いのが気づいたら抜け落ちるみたいだね。  
ミキ いや、そうなのよ。ほら、いきなり何の前触れもなく、  
気がついたらわかんなくなっちゃうから！  
三宅 この人この前ね、私のところにね。枕持ってきて、  
これなんですか？っていうのよ。  
祐志 ええ。  
三宅 枕が何だかわかんなくなっちゃったんですって！  
坂田 枕？  
三宅 それで、真剣な顔して、三宅さんこれ頭に敷いて寝たら  
ものすごく寝やすいですよって！  
ミキ そりゃあ、そうだろうって！  
坂田 いや、笑われてますけど、僕にはね、その枕？っていうのが、  
頭に敷いた時？革命だったんですよ。  
祐志 怖いですよ！  
坂田 見つけたなあーっていう  
三宅 見つけたなあーじゃないから。  
坂田 そんなこと言ったら、姉さんこの前、自転車のこと

わかんなくなっちゃったじゃないですか！

ミキ だからあれは違うって！

坂田 いやいやいや、大問題だよ！朝ね、外で山口さんと二人でジーーーーッと

自転車見てるからどうしたの？って聞いたら、突然、これ何？って感じなの！

祐志 ええ！

三宅 自転車が自転車だって認識できなくなったらマジで怖いよね！

坂田 うん、だってもう乗れるかどうかもわからないんだから！

三宅 で、乗り物だよーって教えてあげても全然腑に落ちてないし。

坂田 謎のマルが二つある金属の物体。

三宅 で、私たちに一言。

坂田 これ、何、発電機？

二人 いや、そうなるときもあるんだけど！

ミキ もう〜だからそれは山口さんのことだって言ってるじゃん！

坂田 いや、でも自転車が自転車として認識できていないときの顔！

三宅 ああいうときってやっぱ黙っちゃうんだよね！

ミキ そんなこと言ったら、三宅さん

坂田 ああ！ああ！こないだお酒のことわかんなくなっちゃいましたよね！

三宅 お酒？

坂田 お酒？お酒ってあれですか？シャケの丁寧語ですかって。それおシャケじゃ

ん。

しゃくれてんのかよ！

三宅 いやちよつと待ってよ！しゃくれてはないから！

■ 笑いまくって、腹がよじれて、危うく死にそうになる。

ミキ バカなことやってないで、ほら。

■ 呆れたミキは捌けていく。

坂田 楽しい

祐志 楽しい？？楽しいって。

三宅 え！？嘘でしょ！

祐志 なにがですか？

三宅 楽しいねって！

祐志 楽しい、とは？

坂田 おいおいおいおい！やっちゃまったなあ！

三宅 「楽しい」は支障出るわ。

坂田 楽しいっていうのは、ウキウキな

祐志 ああ、ウキウキ！

坂田 が、楽しい！

祐志 そう、楽しい！

三宅 祐志さん、ペースはやー

坂田 じゃあ、もう伝家の宝刀教えます。

祐志 これ、山口さんには言っちゃダメですよ。

祐志 はい

坂田 やばい！

祐志 やばい？

坂田 なんかわかんないことが起きたら基本的には、やばいですねーって返しておけば大丈夫なんですよ。

祐志 そうなんですか！？

三宅 やばいは最強の言葉です。

坂田 何に対してもやばいで返せますから。もう怖いよもやばいだし、めちやくちやハッピーなこともやばいだし、ありとあらゆる感情はやばいに置き換えられるんですよ。

祐志 えーやばいですねえー

坂田 いいじゃないですか！

祐志 やばいっすねー

坂田 え、この服どう思いますか？

祐志 やばいですねえー

三宅 私、可愛いですか？

祐志 ……やばいですねえー

坂田 この後、飲みにも行きます？

祐志 やばいですねえー

坂田 完璧ですね。

祐志 え、最後のも大丈夫なんですか？

三宅 大丈夫ですよーこれはね、もう緊急性の高い時に？言葉に詰まりそうになつたら使えбайいんですから。

三宅 まあ、これは私たち、ワードホリックになつた人は全員知っておくべきことかなと。

坂田 もうこの一言喋れば、とりあえずなんとか、なるから（と言いながら泣き崩れる）

三宅 ミャー~~~~ケ~~~~



涼子 ……。  
祐志 自転車の絵、描けるか？  
涼子 自転車？

■ 自転車を描く、涼子。

涼子 自転車。  
挿絵 バランス悪いわ！  
祐志 ミキさんは自転車が何なのかわからないそうだ。  
涼子 え、自転車が？  
祐志 うん  
涼子 自転車だってわからないの？  
祐志 発電機だと思っただらしい。  
涼子 ああゝ笑  
祐志 坂田さんは、枕がわからないらしい。  
挿絵2 ええええ、枕？  
祐志 三宅さんはお酒が。

■ 祐志は、再び、橋を描き出す。

涼子は自分のカバンから消しゴムを取り出す。

涼子 何それ？  
祐志 橋から川と工場を見ると  
涼子 水面に工場の光が反射して、  
挿絵 光の道ができる  
挿絵2 あなたが言わないの  
祐志 光の道ができる。  
涼子 綺麗なんだろうね。  
祐志 橋の近くまで、道路の整備、  
工場長が役場をお願いすることになってるんだよ。

■ さらに熱心に、描きだす祐志。

涼子 花ちゃんのお父さんが心配しなくていいって。  
祐志 工場長が？……。そうか。

■ 描いていた手が止まる。  
自分の股下、お尻の下を見る。  
涼子は、消しゴムを差し出す。

涼子 消しゴム。  
祐志 ……おお。  
涼子 股の下から探してたから。

■ 娘の気遣いへの嬉しさと、ここまでの自分の状況の悲しさで  
間が空く。そう思いたいという気持ちに  
皮肉を交えてしまつて。

祐志 上京できて良かったな。

涼子 え

祐志 生活は慣れたか？

涼子 商店街の道が狭いのか、道路挟んで向かいにもコンビニがあるのか、  
普通に瓦の屋根がいっぱいあるのか、それが楽しいかな。

挿絵 あと（ひとネタ）

挿絵2 あと（ひとネタ）

祐志 何だっけ、あの人？

涼子 矢野さん

祐志 ああ、矢野さんとも連絡取ってるのか？

涼子 うん、早速もう書き始めてるよ。

祐志 そうか。

涼子 お父さんにもちゃんと見せるから。

祐志 ……。

涼子 お父さんにも読んでほしい。

祐志 ……お父さん、帰ったらまたすぐ、橋作らなきやだからなあ。

■ また描き出す。

涼子 そっか。

挿絵2 ちよ、気まづいじゃん！

挿絵 なごませろい！

涼子 あ、一緒にプリン食べる？

■間。

祐志 おお。プリン？

■ 涼子は、プリンを美味しそうに食べる。

■ 祐志、プリンが何なのかやはりわからず。  
でも、食べる。

涼子 美味しい？

祐志 やばいねえ

涼子 う、うん。

■祐志、プリンを物珍しそうにしてる。

涼子 橋描いて。私も帰る。帰って書く！

祐志 おお。

■ 涼子、帰る。

■ 祐志、残りのプリンを食べる。

祐志 (プリンを食べて) やばい。

自転車、枕、お酒、発電機……

■ やりきれない思いの祐志、捌けていく。

■ 挿絵と挿絵2、語りがある。

語り 私と妹は、人間の姿をしていたが、一つだけ人間にはないものが付いていた。

エラだ。小さな海沿いの街に、私も妹もエラがついた状態で生まれた。

小さい頃は、何の疑問もなく、楽しく遊んでいた。

挿絵 いっせーのっでってやつやる？

挿絵2 うん、いいよ！

挿絵 ちょ、手出して。

■ 観客の手も借りて、大人数で指スマゲームを展開する。

挿絵 ぴったりだった場合は、後で粗品をプレゼントします。  
それとエンディングで私メインの別 ver.になります。

■ 本当にぴったり合うとエンディングで原ちゃん特別 ver.に  
変わります。

粗品は、秘密の URL をプレゼント。(台本データ等)  
とは言っても大体失敗。

語り しょうもない遊びをたくさんした。

泳ぐのが得意で、ずっと海の中にいることができた。

小さな魚をとることもできた。

私のエラは成長しても大きくならず、気づかれることはなかった。  
だけど、妹のエラは違った。

■ めちゃくちゃ大きく発達したエラを持つ妹が再登場。

語り 妹のエラは信じられない大きさに発達していった。

こんなに大きくなるまだ前、ある日、

■ やんちゃな男の子(日替わり)が登場して

やんちゃ お前、耳の裏の変な奴と○○が気持ち悪いんだよ！

語り エラと、○○を馬鹿にされた。

周りの子どもたちも妹を一斉に馬鹿にした。

もう誰とも会いたくない！

妹は、海の中に逃げ込んで、私もそのあとを追いかけた。

妹は、もう二度と陸へ帰りたくないとふさぎ込んでしまった。

■ 妹は捌ける。

語り 私は、妹を放っておけなかった。

海で小さな魚を取ったり、港の端のゴミ捨て場を漁って生活をした。

妹を一人にはさせられない、その思いで、大きい生物から逃げ、必死に  
生きた。

ある日、妹とコソコソゴミ捨て場を漁っていると、一人の男性が  
声をかけてきた。

■ 男性が入ってくると、妹は逃げる。

語り その男性は、ゴミを漁る私を見ても、びっくりした様子はなく、

男性 おいで。

語り 優しく声をかけてくれた。

挿絵 (鼻息全開) 好き

語り 私は、恋をしてしまった。一瞬だった。海へ逃げ込んだあとにわかったことだが、私はものすごく惚れ症だった。

語り 漁師をしているというその男性は、私にすごく優しくしてくれた。

挿絵 名前、なんていうの？

男性 僕の、名前は、「妹を見世物小屋に売る介」だよ。

挿絵 え？

男性 「妹を見世物小屋に売る介」だよ。

挿絵 ……どっからが、苗字？

男性 妹を。

挿絵 下の名前が？

男性 見世物小屋に売る介。

挿絵 大好き。

語り 名前なんて関係ない。妹を見世物小屋に売る介？こんな優しい人が

そんな野蛮なことをするはずない！売る介は、私と妹に家を与えてくれた。

私と売る介は、どんどんと心を通わせた。

挿絵 毎朝、私があなたにわかめの味噌汁を作って、船が帰ってくるのを

港で待ちます。

■ 売る介は、挿絵を抱き寄せる。

挿絵 売る介？妹を見世物小屋なんて売らないよね？

男性 当たり前だろ！？僕を誰だと思ってるんだい？

妹を見世物小屋に売る介だよ。

絶対に売らないよ！

語り そう言うと、私をまでも抱き寄せた。売る介は、私を愛し、大切にしてくれた。

ある日、売る介は、妹を見世物小屋に売った。

挿絵 え？！

語り 絶対に売らないって言ったのに！？どうして！？

私は妹を見世物小屋から命からがら奪い返した。

だけど、妹は

■ 挿絵の腕がめちゃうくちゃ長い。

語り 腕の長さを改造されていた。

私も妹ももう誰のことも信用しない。

私たちは、海の中で孤独に孤独に生きていくことを選んだ。

■ 曲が大きくなって、場転。

■ S E 雑踏

入れ替わりで、栗男がやってくる。

栗男 すみません！

本日 はい

栗男 自分、あの、歌やってて、良かったら聞きませんか？

本日 いいですよ。

■ 思いの丈を歌ったり、たまに違うことしたり、

すべらない話したり、出演者のあれやこれやを言ったり、

逆になんかやらせたり、色々。死力を尽くす、栗男。

たまにおひねりがもらえる。

栗男 ありがとうございます。

■ 涼子が通りかかる。というか、たまに涼子も

ターゲットになったりするから、無理くりに出会う。

栗男 あれ、涼子！！！！

涼子 栗男？え、何してるの？

栗男 見りゃわかんだろ、路上パフォーマンス。

涼子 そうなんだ。

栗男 え、てかなんで東京いるの？

涼子 お父さん、病気になっちゃって。

栗男 病気？

涼子 ワードホリックっていう。

栗男 うわ、最近の流行りのやつじゃん。

涼子 みたい。

栗男 うわ！でも、てかマジか！え、なんか聴いてく？

涼子 いや、絶対いい。大丈夫。

栗男 あ、そう。

涼子 うまくやってるの？

栗男 まあ、それなりに。そっちは？

涼子 なんかいろいろあつたんだけど、今書いてるの。

栗男 え、良かったじゃん！

栗男 おやつさんはなんて言ってるの？

涼子 まだこっち来てから読んでもらってなくて。

栗男 おやつさんに、喜んでもらえるといいね。

涼子 うん。そっちは？

栗男 中々上手くはいかないね。

涼子 お父さんね、もしかしたらね、

プリンのことわからなくなっちゃったみたいで。

栗男 え！？プリンのこと分からない！？なわけ！！！

涼子 私が食べるところ見せたら、食べ物だってことはわかったんだろうね。

ジロジロってプリンを眺めて。

恐る恐るスプーンで食べ始めたの。

栗男 ……す、スプーン？

涼子 やってんなあ！

栗男 す、ぷーん？

涼子 これはやってるなあ！

栗男 す、ぷーんってなんだよ！

涼子 栗男くん、ちよつと来て！

栗男 おい、涼子、スプーンってなんだよ！

■ 栗男のセリフの途中で、電話をしながら祐志が入ってくる。

涼子、栗男は捌ける。

祐志 あ、もしもし、奥本です。

花 ああ、おやつさん？

祐志 花ちゃん？

花 調子どう？

祐志 うーん、身体は元気なんだけどね、やっぱり。

花 そっか。でもまあ、健康ならそれが一番だね。

祐志 そうだね。

花 涼子は元気ですか？

祐志 あ、うん！なんか本書き始めてるみたい。

花 そうなんですね。よかったあ。

祐志 ……あ、あの花ちゃんのお父さんと役場とで進めてる橋のことで電話したんだけど。

花 作り始めてるよ！

祐志 え？

花 パパが、引き継いで設計完了させてもう作り始めてて。

祐志 早いなあ。

花 観光用の橋で、作り始めたら割りとすぐ出来ちゃうって。

祐志 観光用？

花 え？工場夜景見るためのほら、観光用の橋でしょ？

川に架けたら川にも工場の夜景が写って、それを正面から見れるようになって。

祐志 観光用？

花 観光用……え、お客さんに観に来てもらうんでしょ？

祐志 そうだね。

花 簡単な作りの橋にするって。だからもう涼子のお父さんは何の心配もしなくていいよ。

祐志 ……何の心配もしなくていいか。

花 新しい病気で大変かもだけど、施設でゆっくりして。

祐志 ありがとう。

■ 電話を切ってしまう祐志。

山口が入ってくる。手にはクリアファイルに入った紙。

山口 大丈夫ですか？

祐志 あ、ええ

山口 わからない言葉が出てきたら、教えてくださいね。

祐志 ……。

■ 祐志は、わからない言葉の意味を聞く。

山口はそれに答える。

答えるににくいものが望ましい。

山口 さっきの娘さんですか？

祐志 あ、いえ、娘の友達です。仕事の依頼をよく受ける会社社長の娘さんで、私、橋の設計とか点検とかやるほとんど下請けなんですけど、今度うちの街にできる橋の着工の目処が立って。

山口 よかったじゃないですか。

祐志 心配しなくていいよって言われちゃいました。

山口 ……？

祐志 いえ、娘と2人3脚で仕事受けてたんで、確かに。よかったです。

山口 娘さん、小説。

祐志 ……。

山口 せっかくだから有名になってほしいですね。

祐志 橋をかけると、そこから川越しに工場夜景が見えるようになるんです。

山口 へえ

祐志 なんていうんですか、すごく、やばいんですよお。

山口 ええ

祐志 S F映画みたいな、夜になると、安全のためにライトアップされるんです

けどね、それが工場によって色んな色のライトで、工場から出る煙が

なんていうんですかね、その、ほんとやばいんですよ

ああ！ものすごい大きい劇場の照明みたいに見えるんです。

山口 いいですねえ。

祐志 きっと人が集まると思うんだけどなあ。

まあ、帰っても仕事はアレなんですけど。無いんですけど。

ここにいれば、娘も心配無いだろうし。

■ ミキが入ってくる。

ミキ え？できてんの？

祐志 いやいやいや

山口 やめてくださいよ。

ミキ 夜遅くに何してんの？めっちゃ淫靡なコンビね。

祐志 ちよつと電話を。

山口 私はそろそろ時間かなと思って。

ミキ ん？

山口 あ、なんでもなーい

ミキ 変なことしないでよ

山口 はい。(ファイルを渡す)

ミキ (ファイルを受け取る) じゃ、また明日！

祐志 おやすみなさい！  
ミキ ニッ！

■ ミキは行ってしまう。

山口 いいですね。

祐志 何がですか？

山口 娘さん、近くにいて、応援できるじゃないですか。

祐志 そうですね。あれ、僕ここにいたらまずかったですか？

山口 いいえ。ミキさん、ちよつと前までラジオのパーソナリティだったんです。

祐志 ラジオ？

山口 で、ある日当たり前に読めてた原稿の言葉が分からなくなっちゃって。

祐志 ええ

山口 もうラジオには戻れないって自分で言うんですけどね。

祐志 たまにラジオの原稿作ってくれ！っていうんですよ。

祐志 原稿？

山口 人から渡されたもの読みたいみたいなのがあるみたい。

祐志 みんな何かしらそりやありますよね。

山口 いやあ、坂田さんはずっと仕事したくないって、欲もないからここが

いいみたいですよ。仕事しないでいいー！夢叶ったー！って言ってました。

祐志 ああ、いいですね。三宅さんは？

山口 三宅さん、婚活中だったんですけど、お相手と話通じなくなっちゃって。

喧嘩になったみたいで。

祐志 ああ

山口 三宅さん、今空いていますよ。

祐志 ええ

山口 チャンスですよ。

祐志 何がですか？

山口 三宅さん！

祐志 ああ、大丈夫です。本当に大丈夫です。三宅さんは、大丈夫です。

だって、娘になんて説明したらいいかわかんないですよ、だから、大丈夫です。

三宅さんは。大丈夫です、三宅さんは。

山口 ああ、もういいですよ、ゴメンナサイ。

祐志 いやあ、だって娘に全然父親っぽいことできてないんですよ。

妻は早くに亡くなっちゃったんです。ああ、妻は、

個人経営の日用雑貨を売る商店を営んで、あの棚があったら、  
こういう距離感（7センチくらい）で洗剤とか陳列してる、しかも奥に  
3つくらいしか置いてない、お菓子とかをこんな風に置いてる、  
この人は一体どうやって生きてるんだろう？っていう、  
あれを営んでました。近所から揶揄だと思っただけで、「コンビニ」と  
呼ばれてました。でも、妻が亡くなって、店は速攻でたたんで、  
娘が家のこと全部してくれて、私の仕事が少なくなってからは、  
大学行かずに事務仕事までさせちゃって。そんな中、私が三宅さんとして  
いうのは本当に大丈夫です。三宅さんとは絶対に。  
山口 ああ、もうゴメンナサイ、本当に、ゴメンナサイ。  
祐志 みんな、それぞれに事情があるんですね。  
山口 はい、そうですね。娘さんの小説楽しみですね？

■ 山口はける。曲が上がっていく。祐志、悔しい。

■ 矢野が入ってくる。涼子もいる。

小説の原稿を渡している。

涼子 どうですかね？

矢野 涼子ちゃん

涼子 矢野さん

坂田 ダメですかね？私はところどころ。

三宅 ん～ちよつと私も。

栗男 確かに？自分もダメですねえ。

涼子 やっぱリストレスになります？

三宅 まあ、私は読み飛ばしても別に気にしないタイプなんで。

坂田 我々は、一度忘れちゃうと、もう覚えてられないんで、何回も同じところで  
つかかっちゃうんですね。

■ ミキが入ってくる。

ミキ お？何？

三宅 いや、涼子ちゃん

ミキ ああ、こんちわ

三宅 WEBでの連載始まったんだけど。

ミキ 小説でしょ、読んだけど？面白いじゃん。

矢野 ありがとうございます！ほら、涼子ちゃん

三宅 割りと順調な滑り出しなんだけど  
ミキ じゃあいいじゃん、え？  
三宅 完成した原稿が  
山口 祐志さんの既にわからなくなっちゃった言葉がかなり入ってるので  
栗男 だったら書き換えましょう！って！  
ミキ 書き換え？！！  
矢野 いやいやいやいや、涼子ちゃん、一般の人には読んでもらって楽しんで  
もらえばいいじゃない。新人作家じゃ結構いい滑り出しだよ？  
栗男 このままだとおやっさんは楽しめないってことですよ？  
坂田 新人、その通りなんだ。  
栗男 涼子はおやっさんにもわかる内容で書きたいってこう言ってるんすよ。  
矢野 そうだけど、これはあくまでうちの連載を楽しみにしてる人に向けて。  
栗男 おやっさんも楽しみにしてる一人っす。  
ミキ ああ、そのおやっさんは？  
矢野 涼子ちゃんが小説書いて持ってきたら、部屋戻ってっちゃって。  
仕事するんだ〜って。  
ミキ 仕事って。  
栗男 おやっさんは何がわかってないんですか？！  
矢野 おい、君！  
山口 ここのね。漁師である妹を見世物小屋に売る介に対して、私が  
挿絵 毎朝、私があるあなたにわかめの味噌汁を作って、船が帰ってくるのを  
港で待ちます。  
山口 っっていう  
栗男 おお、主人公の「私」が、久々に陸にいる人間の漁師の男に  
想いを伝えるすげえいいセリフっすよ。これがないと、後で  
妹さんが売られた時の、なんていうんですか？！あの〜はい！  
ミキ その〜、なんていうの？説明できない。  
三宅 振り幅を持たせるためにね。  
山口 その一行、祐志さんは多分ほとんど理解できないと思います。  
矢野 え？  
涼子 え？  
山口 わかめも。味噌汁、船、港  
矢野 いや、もうほとんどわかってないじゃないですか？！祐志さん  
ミキ おま、ちょ、デリカシー  
坂田 いやあ、これ祐志さんからしたら  
挿絵 毎朝、私があるあなたに「分からない」の「分からない」を作って、

「分からない」が帰ってくるのを「分からない」で待ちます。  
坂田 ほとんど「分からない」でしたね

■患者たちは、一斉に「やばいやばいやばい」

坂田 涼子ちゃん、さすがにちよつとは書き換えた方がいいかもね？  
矢野 は？いや、

三宅 お父さん、これじゃあ、

ミキ 涼子ちゃんのオツケなの？

涼子 わかめの味噌汁

坂田 わかめの味噌汁かあ〜

栗男 おやっさん味噌汁のこと分からないんですか？！

三宅 祐志さん今朝飲んだものは何だと思ってたんでしょね？

坂田 それはもう

挿絵 毎朝、私がおなたに

それはもうコクうまな茶色い液体を作って、船が帰ってくるのを港で待ちます。

■一同、いいんじゃない？のリアクション

矢野 いや、なんか楽しくなっちゃってません？

涼子 矢野さん、やらせて。

矢野 いや、もう告白感が全然ないですよ！

栗男 大丈夫だっておやっさんに読ませるための書き換えをしてるに

過ぎないんだから。(といって、パソコンを奪う！)

ミキ そうそう！別にこれ、世の中に発表するものじゃないんだよ！

矢野 だったら別な仕事もあるんだよ、涼子ちゃんには

涼子 矢野さん、ちよつとだけ変えさせて。

坂田 おけ、次が

山口 船ですねえ

坂田 ああ、まあ、船はボートとか、イカダとか何とでもなるんじゃない？

ミキ おお〜

涼子 イカダにします。

ミキ それから？

山口 港ですね

三宅 港〜？

坂田 港は

挿絵 毎朝私があなたにそれはもうコクうまな茶色い液体を作って、イカダが、海の陸地に入り込んだ地形を利用したり、防波堤を築いたりして船舶が安全に停泊できるようなところに到着するのを待ちます。皆 長い長い長い、けど、いいじゃない？  
坂田 なんともなく告白感が残ってるんじゃないですか！？  
ミキ まあ、悪くないよ  
山口 私むしろくらいな

■一同、なんとなく拍手。

三宅 涼子ちゃん半ばふざけちゃった感じだけど、どう？？

涼子 (頷く)

矢野 ちよつと涼子ちゃん！

■矢野は、こちよこちよの刑に処される。

三宅 さつきからやいのやいのうるさいねえ、あんだ！

矢野 だって！これはうちの会社の

三宅 お父さんにも楽しんでもらえるようにって言って、娘が考えてんだから  
尊重してやるの当たり前だろ！ねえ

涼子 うん

ミキ だから別に、どこに出すでもなくお父さん用のやつと、  
そのー一般向けのやつと二つ書けば問題ないじゃん！

矢野 そうなんですけど。

ミキ あんたが認めて連れてきたんでしょ。

矢野 まあ、はい

ミキ それくらいのはしてやんなよ。まだ若いんだよお。わかった？

矢野 わかりましたよ。それでお父さんが喜んでくれるなら。

涼子 …

ミキ え、なに？

山口 祐志さん、涼子ちゃんの小説にあんまり

三宅 え、そうなの！？

坂田 読めないってだけじゃないの！？

ミキ 前向きじゃないの！？

涼子 はい

山口 まあでもこれで読んでもらえるかもしれないし。

坂田 確かにそれはある。

三宅 涼子ちゃん的には、お父さんにも認めてもらうための書き換え的な涼子 はい

ミキ 泣かせるねえ

坂田 本当泣かせるねえ、健気だ

栗男 オツケー（矢野のカバンからパソコンを出し、メールを打っていた）

矢野 お前、何触ってんだよ。

栗男 さーせん。

矢野 さーせんじゃな……ちよ、待って。お前まじで何やってんの！？

ミキ 何？

矢野 お前なんで、こっちの今書き換えたやつ上に送ってんだよ！

栗男 え？

坂田 矢野さんどうしたの？

矢野 いや、こいつが今の書き換えた祐志さん用によって変えたやつを上にあげちゃって！おい！

栗男 さーせん！

ミキ え、それだいたいどうぶなの！？

矢野 いや、全然だいたいどうぶじゃないっすよ。

涼子 ええ？！

矢野 さっきの書き換えのやつで連載流れちゃうから！

坂田 それはまずいんじゃない！？

ミキ イカダでどうたらこうたらコクうまなーなやつ載っちゃうってこと？

矢野 いや、すぐ連絡して止めますけど！

栗男 さーせん！

矢野 さーせんじゃないよ！変なの送ったって怒られんの俺なんだから！

勘弁してよお！！！！

栗男 さーせん！

矢野 これで機嫌損ねて、掲載見送りとか絶対勘弁だから！

■ 場転。先ほどのメンバーがいる。

ミキ すごくね。

三宅 やばくね。

坂田 やっちまってますよね、これ。

ミキ これはねえ、完全にやっちまってる。

三宅 矢野さん

矢野 めちやめちや人気なんですけど……！！！！！！小説……！！！！！！

坂田 え、いや、これすごいですね！

矢野 いやありがとう栗男くん！

ミキ え、結局あんときの栗男のミスがきつかけ？

矢野 そうなんですよ！栗男くんが上層部に、書き換えたやつを送った

じゃないですか？あれが社長にウケて、WEBで公開したらそこらじゅうの

一般ピーポーにも大当たり！

涼子ちゃんすつかり時の人ですからね。

■と言いながら矢野は、WEBページを見せる。特集が組まれている。

三宅 結局あれから連載が書き換えれば書き換えるほど順調だもんね。

矢野 まさしく！独特の言い回しがもう各所から絶賛です。

■坂田が入ってくる。

矢野 坂田さん！

坂田 おお、ご苦労！

矢野 最新号もマジでめちやくちや評判いいです。

坂田 あざす！

矢野 もう皆さんのおかげです！いや、もちろん涼子ちゃんが考えた

ストーリーが素晴らしいことは間違えないんですけど！それがねえ、

こんなに売れちゃうってのは、お三人さんのお力が多いにあると言っても

過言じゃないです！

ミキ やめてよお！

坂田 かごんじやない？かごんって！

矢野 あ、あのーお三人さんのおかげってことです！

坂田 やだなあーもうー褒めても何も出ないよ。

三宅 いや、なんか涼子ちゃんの小説？考えてるからなのか、

最近頭の調子もいっていか！なんか前よりも言葉が

抜け落ちにくくなっただっていか。

ミキ それはあるね。

坂田 ウインウインです！

矢野 いやーそんなそんな。

三宅 あとはねえ、祐志さんがちゃんと認めてくれればいいんだけどねえ。

矢野 まあ、そうなんですけどねえ。

ミキ やっぱ全然読んでない？

矢野 んー、一応連載は全部紙にして渡してるんですけどね。

ミキ まあ、そこだけはちょっと気がかりだけでも。

坂田 うん！涼子ちゃんの一部では相当な人気出てますからね。

父親としては嬉しいに決まっていますよ。

三宅 この後の展開は決まってるわけ！？

矢野 まあ

ミキ ノリノリじゃん

三宅 いや、もうここまでできちゃうとき、なんか人の作品という感じでもないから。

矢野 次の構想も涼子ちゃんの中で決まってる、徐々にラストに

向かっていくみたいなの。

坂田 おおー

■ 山口が、涼子と一緒にやってくる。

坂田 出た！作家先生だ！

涼子 あ、いえ、そんな！

三宅 何言ってるの！？ちょっとは自覚出てきたでしょ！？人気の。

坂田 (WEB ページを見て) 新進気鋭の天才作家、独創的な言い回しで人気を博す！

言葉の魔術師！

三宅 あれ！？これ矢野さんも載ってるじゃん！

ミキ うわれ！本当だ！

矢野 どもー

三宅 んー、あれだめだ、ここなんて？

ミキ 新進気鋭の天才作家の裏には、編集部の剛腕あり！矢野さんじゃん！

坂田 えー、矢野さんまで、もうなんだかすごいことになって！

■ そう言うと、坂田は矢野のスマホを袖へ投げる！

涼子 いや、そんな、皆さんのおかげで

坂田 ああ、そういうのいいからいいから。もうね、私たちはドロップアウトした人間たちなんでね

三宅 別にドロップアウトしたわけじゃないんだけど

涼子 本当にありがとうございます！

三宅 かしこまらなくていいよ！

坂田 　で！本日の原稿は！？どちら！  
涼子 　はい！こんな感じにしてみましたんですけど！

■ 一瞬で読んでしまう。

坂田 　なるほどねえ。

三宅 　ああ、ちよつと待って、私これなんだかわかんないかも。

坂田 　きました！書き換えポイント！

■ 入れ替わりで、挿絵がサブステージへ。

挿絵 　順調そのものじゃん！？

涼子 　うん

挿絵 　私はちよつとストレートな言葉がなくなって寂しいんだけどなあ。

涼子 　でもそれは

挿絵 　皆まで言わなくてもよし。わかってるから。

涼子 　わかってる？

挿絵 　優しさってことでしょ？

涼子 　ん？

挿絵 　矢野さんのことも、施設の人のことも、お父さんも、

もちろん読んでくれてる一般のお客さんのことも、全方位ちゃんと  
考えたからこそ

涼子 　うん

挿絵 　みんなに喜んでもらえるようにって書き換えた結果！

涼子 　まあ（嬉しい）

挿絵 　はいー、順調順調！

挿絵 　大丈夫よ、上手く言ってるんだから。

涼子 　お父さんの説得がさあ。

挿絵 　お父さんが読んでくれないのが気になるってかい！！！

涼子 　うん。

挿絵 　でもそれ以上に、忙しいし、それが嬉しいくせに！

矢野 　おーい

挿絵 　キタキタ！

矢野 　新しい仕事が決まったよ！！

挿絵 　やったじゃん！

涼子 　ありがとうございます！

挿絵 ほーら、順調そのもの

涼子 でも、矢野さん

挿絵 私が売れて、東京に残ると、お父さんは地元へ帰っても一人じゃ仕事にならない。

矢野 なんだっけ？事務？請け負ってたんだもんね。でもそれはやりたくないんでしょ。

涼子 うん

矢野 だったらこのまま残って好きなことを仕事にする！お父さんに

読んでもらえさえすれば、お父さんだって理解してくれるはずなんだから。

涼子 こんなに

矢野 うまくいくと思っただけじゃなかった？

涼子 ？

矢野 こんなにうまくいくと思っただけじゃなかったんでしょ！

挿絵 そうなんすよ！言っただけじゃなくさ！

挿絵2 自分にもっと正直になっちゃいなさいよ！

矢野 涼子ちゃんの書きたいって思いと、お父さんにも読んでもらえるようにっていう優しさで、両方とった結果がこれなんだよ。

挿絵 そう！実際、こんなこと普通ねえからな！

矢野 早すぎるんだよね。

涼子 ？

矢野 田舎に比べてここは起こることがなんか目まぐるしくて、

何でもかんでも早くてね。でも慣れだから。

涼子 はい。

矢野 ほんとに大丈夫！涼子ちゃんと小説のことは僕が全部やるから。

涼子 ありがとうございます。

矢野 全然！とうとう次の仕事も来て、忙しくなるね。

■ 栗男と祐志

祐志 まさか栗男もここに来るとはな？

栗男 はい！

祐志 で、そのミュー、なんだ、音楽はどうなんだよ。

栗男 もうやめました

祐志 早すぎだろ

栗男 さーせん

栗男 アルバイトばかりできつかったつす。

祐志 ある、バイト？  
栗男 はい  
祐志 アルバイトってなんだ  
栗男 え？  
祐志 ある、え、なに？  
栗男 アルバイトっす！  
祐志 だからそのアルバイトってなんだよ  
栗男 アルバイトは通称、バイトっすね。  
祐志 いや、通称を聞いてるんじゃないか。  
栗男 え、アルバイトわかんないっすか。  
祐志 あ、すまない。  
栗男 俺のことですよ、おやっさんのところで働いてた頃の俺を  
アルバイトっていうんですよ。  
祐志 俺のところまで働いてた栗男は栗男じゃないか。  
栗男 あああ、そうじゃないっす。アルバイトっていうあれです。  
働き方？  
祐志 アルバイトって働き方？  
栗男 やべー、おやっさんの頭めっちゃ悪くなってんじゃん。  
アルバイトっていう、お手伝いさんのな？  
祐志 ほお  
栗男 祐志さんみたいなベテランがいて、その下にいるお手伝いさんがアルバイト  
祐志 ベテラン？  
栗男 はい、ベテランの  
祐志 ベテランてなんだ？  
栗男 え？  
祐志 ベテランてなんだ  
栗男 やばいやばいやばい  
祐志 ベテラン  
栗男 あれです、ベテランは、めっちゃ長い人です。  
祐志 長い？縦に？  
栗男 ああ、違います！あれです！長さが長いんじゃないか、  
祐志 ほお  
栗男 歴史がある人です。  
祐志 ん？  
栗男 ベテランは、なんだ？仕事でえ、歴史を感じる人です。  
祐志 玄人ってことか？

栗男 く、ろうと？

祐志 いや、玄人だよ。

栗男 く、ろうと？

祐志 同じ？

栗男 意味のことを言ってるんじゃないですか？

祐志 言ってるんじゃないですか？ってなんだ？

栗男 え？言ってるんじゃないですか？がわかんないんですか？

祐志 言ってるんじゃないですか？言ってるんじゃないですか？

栗男 やべえ、イかれた

祐志 はっはっは！冗談だよ！

栗男 何が？？？

祐志 栗男、冗談だよ

栗男 どっからがですか？？

祐志 元気にやってるならそれでいい

栗男 おやっさんの作ってた橋、着工したんですか？

祐志 ああ、なんだか俺の知らないところでもう始まったよ。

栗男 ああ、そうすか。

祐志 ……。

栗男 おやっさん、仕事戻れるといいっすね。

祐志 うん、戻れるといいなあ。

■ 場面が変わる。

語り どれだけ、目を重ねたか？。二人、静かに。

ひっそりと。妹の腕は、一回引きちぎって、再生して

元に戻った。私は、

挿絵 妹は怪物なのかな？

語り そう思った。

挿絵 (えづく)

挿絵2 だ、大丈夫？

挿絵 私は、悟った。まさか、そんなはずはない！

私のお腹に？

売る介の子どもが？

なんとも言えない気持ちだった。

私はどうしたらいいの？

それでも今日も、海は冷たい。寂しい。  
妹を、一人にはできない。

だけれど、私は私の自由がほしい。  
だんだんと海も嫌いになった。

挿絵  
空へ飛びたい。海の危険も、陸での悲しみもない、自由な空へ。  
少しでも高いところへ行くのよ！もう一度あの頃の自由だった、  
自由だったあの頃へ帰るのよ。

語り  
そう言うと、「私」は思いっきり駆け出して、川を上った！

あの橋も超えて、川を上った！夜も必死に。

全てを忘れて、何もかもを捨てて、本能のままに。

挿絵  
自由な空を求めて。星が輝く夜空を目指して！明け方の広い空を迎えに！  
空まで伸びそうな青い川を私は登るのよ！

■ 映像 「しゃけのしまい」

場転。坂田、三宅、ミキ、矢野がいる。

坂田と三宅は中身を読んで号泣している。

ミキ え、ちよ、てかこれそう言うタイトルだったんだね？？

矢野 いいじゃないですか！

ミキ しゃけのしまいで

矢野 いいタイトルでしょ？

ミキ いいのか！？

矢野 なんか、ものかんづめ、たいのおかしら、しゃけのしまい

ミキ テイスト近いけど

矢野 売れ線意識したんすよ！

しゃけのお姉ちゃんと妹が、最後は、川を遡上していくんですよお！  
もう感動的というかなんというか。

ミキ 売る介の子どもも孕っちゃって？

矢野 本能には勝てない涼子ちゃんのセンスですね。

ミキ え、最後のシーンでしゃけの姉妹は、空へは行けたの？

矢野 僕の解釈なんですけど、空には行けたと思うんですけどね、  
川を上って無事に本当に空へ上ったみたいなの、ファンタジックなオチとも  
取れるんですけど、川から空へ登ろうとしている間に力尽きて、  
空に昇るっていうのが、天に召された的な考えもできるなあと。

ミキ なーなーるほどねえ（無理くり解釈）

矢野 そうなると、二人は死んじゃってるから、タイトルがしゃけの終いみたいな！

シヤケのおしまいって意味でも取れるでしょ？！

ミキ ちよちよちよちよ！これめっちゃめっちゃ売れてんの？

矢野 そりゃあもう、ごちそうさまです！

ミキ 今の人たちの求めているものがわかんない。

矢野 いやあ〜聖地巡礼的なこともSNSで話題になってますからねえ。

ミキ え！？もうそんな感じになってるの！？

矢野 そうですよお、涼子ちゃんの地元もひそかな人気スポットになってますからねえ。

ミキ それで橋を超えて川を登っていくってことね。

坂田 聖地巡礼、我々もしたいもんですなあ。

矢野 まあ、これが終わったら第2作目ですかね。（にやげが止まらない）

ミキ 2作目？

矢野 （素敵なタイトルを口にする）

坂田 それも読みたいですねえ。

ミキ いやいや、これさあ、もう間もなくポエムの量の文章しかないじゃん！

三宅 祐志さんや最近じゃ私たちのことまで考えて書いてくれてんのよ。

坂田 ミキ姉さんは、僕らと違って症状が軽いからいいですけど、僕らにとってはいやあ〜もう逆にいいんじゃないですか！

■ 山口が入ってくる。

山口 確かに新しさはありますよね。いいと思いますよ。

ミキ この人たちのなんだかい脳のトレーニングになってるし。

ミキ そうなだけとおお

矢野 そうなんですよ！小説の連載としてスタートしたのに、

どんどんと文字の情報が少なくなっていく！

でも涼子ちゃんの小説は、言い回しを変えれば変えるほど、

最近じゃ言葉が減っていけばいくほど、いい味だって話題なんですよお。

すごくない！？お父さんのために書き換えた表現が、世間では奇才だなんだと

話題になって、お父さんのために削った文章の少なさが

これまた読者の想像力を掻き立てる。

坂田 まあ、確かに僕らも別にこれで全然売れてなかったらあれですけど。

三宅 売れちゃつてると我々も気分がいいというか。

山口 なんか手伝い始めちゃって、涼子ちゃんもまんざらじゃないでしょ。

ミキ まあ、確かに〜！

坂田 なんかもう色々どうでもいい時に入ってきた若い子見るって、なんか

ほっとけなくなっちゃったっていうかね。  
矢野 そうなんですよ、涼子ちゃん運いっっちゃいいですよね！

■ 場面が変わる。

祐志 先生

ミキ 私は医者じゃないよ。施設研究員。

祐志 ……。仕事に復帰したいんです。

ミキ 私と医師の判断だと

祐志 工場の夜景、絶景なんですよ。

ミキ ……昨日の夕ご飯は何を食べましたか？

祐志 え？

ミキ 昨日の夕ご飯は？

祐志 何だったかな。さんまときんぴらと……

ミキ おみそ汁

祐志 ……（わかってないことをごまかして）はい、それです。

ミキ そういえばさんまは、醤油派ですか？砂糖派ですか？

それともソースかけます？私は砂糖派なんですけど。

祐志 僕も、砂糖派です。

ミキ ……。

祐志 やり残したことがあって。

ミキ 観光用の橋ですか？

祐志 ……観光用？

ミキ 向こうでは、自転車での通勤もあるんですよ？

祐志 自転車？

ミキ ……ちよつと復帰は厳しいですね。

祐志 ちよつと、仕事しに行ければいいんです！

■ 涼子が入ってくる。祐志はその場に残っているが別空間。

ミキ 正直、日常的に使用するものの名前も。

涼子 そうですか。

ミキ ワード・ホリックと言う病気の一番の怖いところは、

言葉が抜け落ちるという大きな障害もそうなんだけど、

厄介なのはむしろ、妄想や生活意欲の低下の方なの。

涼子 ……。

ミキ 人によってかなり個人差があるんだけど、坂田さんは、もうほとんど自分の将来のことを考えてなくて。言葉の障害はまだ軽度なんだけど、そっちの方で社会復帰が難しい状況で。

三宅さんもここでの暮らしに何の疑問も持っていない。

働くという考えが頭から抜け落ちてしまっていて。

妄想が特に強いのが山口さんで、山口さんは私のことを

ワードホリックの患者、この施設の利用者と決めつけてる。

それが他の二人にも移って今は、私はすっかり患者扱い。

山口さん、ラジオパーソナリティだったんですけど、復帰はちよつともう。

涼子 症状が進行すると、どうなっていくんですか？

ミキ

言葉の問題がどうしてもつきまとうから、徐々に話ができなくなっていくって。並行してお父さんの場合は、お仕事に興味を示さなくなっちゃうのかなと。

もう一人しておくのは。

■ SE フラッシュとシャッター。矢野が入ってくる。

矢野 えーこの度は誠に申し訳ございませんでした！

記者 どうしてこのような盗撮などという行為をしたんですか？

矢野 そうですね、もともと興味がありました。

記者 女子高生を電車で撮影したということで間違えないですか？

矢野 間違えないです。

記者 これだけ一部で話題になっていた作品、作者の奥本涼子さんと人三脚で飛ぶ鳥落とす勢いの中、涼子さんへの影響は考えなかったのですか！？

矢野 それとこれとは別のこととして考えてました。

仕事とプライベートは分けたいというか。

■ 記者から「反省してます？」の嵐

記者 どんな感じで盗撮してたんですか？

矢野 (実際にやる)

■ シャッター音とフラッシュがひときわ多くなる。

記者からそのあとも二、三、質問。

矢野 本当にすみませんでした！

■ 矢野はいなくなる。これがなんと矢野のラストシーン。

坂田 矢野さんのニュース、毎日やってますね。

三宅 いや、だって、盗撮の仕方、会見で実際にやる普通？

山口 すごい勇氣よね、感動しちゃう。

■ 間。

ミキ 涼子ちゃんの作品もある意味、話題にはなってるんだけど、

野次馬が心もとないコメントとか書き込んでるし。

■ 三宅、祐志が来るのを察してテレビを消す。

ミキ 祐志さん

祐志 娘のことで。

坂田 いやいやいや

三宅 そうですよ、私たちもなんか気づけなくてね。

栗男 誰がどんなこと考えてるかとか誰が正常だーとか、わからないっすね。

三宅 いやでも、わたしらの中では矢野さんってめちゃくちゃいい人だったけどなあ。

■ 涼子が意気消沈で入ってくる。

祐志 涼子。

涼子 ああ、なんかごめんね。

挿絵 あんた悪くないよ！

祐志 いや

涼子 一旦、WEBでの掲載中止だったって。

祐志 ……そうか。

涼子 こんなにうまくいくはずないんだよ。……コツコツやるのが当たり前。

祐志 ……。

涼子 面白くないって。

妹を見世物小屋に売る介ってなんだよ！って。

栗男 まあそれは確かに。

■ ミキ、栗男に張り手。

三宅 そういう人は別に最初から涼子ちゃんのこと応援してた人じゃないよ。

坂田 そうだよ、僕らは涼子ちゃんのこと

涼子 (遮って) せっかく東京来たのに。

栗男 涼子。

ミキ 他人のせいで自分に煽りが来ると辛いよね。

涼子 東京、来なきやよかった！

一同 ……。

涼子 私、何もしてないよ！どうして私まで批判されなきやいけないの！

面白いってみんな言ってたもん！

掲載中止！？は！こっちから願い下げだわ！

読んでもらわなかったって結構！もう書かない！バカバカしい！

私を否定するのなんて簡単にできるのよ！躊躇もなく！

坂田 いや、みんな協力したんだから

涼子 お礼言えばいいの？！ありがとうございます！お父さん、私、もう帰る！

ミキ いや、ちよつと待ちなよ、祐志さん

涼子 私が向こうで面倒見ます。お世話になりました。

一人にしなければ帰れるでしょ？

ミキ そうなんだけど、祐志さんはここに残るって

涼子 ああ、そんなこと言ってくれてたんですか！？

でも、もうその必要もないです！

お父さんも嬉しいね、これで娘共々、田舎に帰って、

適度に仕事もできるかもしれないね！

■父と娘、目が合う。間。

涼子 ……。お父さん、ごめんなさい。

祐志 ？

涼子 上京できたのが嬉しかったから。

なんかずつとお父さんと仕事してたから。

お父さんのこと嫌だったから。

お父さん、病気になって、東京「行かなきゃいけなくなった」なのに、

「来れた」って思ったから。

お父さん、絶対辛いのに、私に何も言わないから。そこはごめん。

祐志 涼子、帰ろう。

■ 場転。

挿絵 帰るの！？もう書かなくなっちゃう？

涼子 どうだろ。頑張りたかったけど、何？

挿絵 いや、急に帰るとか言うから。

涼子 大丈夫、てかあんなたがグイグイ書こう書こうって言ってくれないから。

挿絵 そういうのも結局、そっちに影響されてるの。

涼子 サシコは？

挿絵 別な現場へ行かれました。

涼子 え？

挿絵 そっちの気持ちに影響されてるの。

涼子 私のせいだって言いたいのに！勝手に出てきて押し付けがましく。

挿絵 私、何もしてないよ！ってさっきあんなたそう言ったよね？

その通り、あんな何にもまだしてないじゃん！

私を否定するのなんて簡単にできるのよ！？

その通り、あんながあんなを否定するのなんて簡単にできるのよ！

涼子 あんたに私の何がわかんのだよ！

挿絵 ずっと見てたけどね、そんな否定の仕方しなくても。

涼子 とにかくもう帰る。

挿絵 あっそ。

涼子 結局お父さんに読んでもらえなかったなあ。

挿絵 原稿は矢野さん毎回紙で渡してたのにね。

涼子 今度は読んでもらえるようなもの

二人 とはもうならないか。

■ 涼子が捌けようとする、挿絵もついていく。

涼子 何でまだついてくるの？

挿絵 そういうのはオートだつてんじやん。そっちの気持ちに影響されてんの。

涼子 (書きたい欲があることを悟るも) もう、書かない！

■ 涼子は捌ける。一同がやってくる。

坂田 うわー！綺麗ですねえ。

三宅 え！？すごい！これめちゃくちゃ絶景ですねえ。

山口 川の向こうの工場が綺麗！

ミキ マジで一人でどっか行ったりだけはしないですよ！

花 まあ、観光用の橋なので。景色を見るためだけに作ったんですよ。

坂田 本場に、小説にあった通りの眺めですね！

祐志 ええ、そうなんです。

ミキ (小説読んでたの？と一人だけ気づいて) え？

花 そうなんですよ！日が落ちてくると、工場の明かりが川の水に反射して、もう川から工場までが全部明るくなるんですよ！

坂田 え？これの設計したのが？

花 はい、おやっさんさんのがベースです。

三宅 えー、かっこいい！

花 橋のデザインもそうですし、川のこの辺に！って決めたのまでおやっさんなんですよ。橋を渡った向こうに、もう全然使ってなかった本当は登山者向けのビジターセンターがあるんですけど、そこからも近いようになって

山口 え！？そっちも行ってみましょうよ。

花 そっちはそっちで森の中からの工場の夜景が綺麗ですよ。

■ 3人とも捌けていく。

ミキはついていく。

花 これで人集まるといいね。

祐志 ……。

涼子 ……。

花 じゃあ、そろそろ時間だから。

涼子 え？

花 おやっさん、日が落ちるよ。

■ 花ちゃんはける。しばらく黙って見てる。

涼子 橋、完成してたね。

祐志 ……うん。

■ 暗くなり、工場からの明かりだけになっていく。

工場の安全用ライトがブルーに変わっていく。

嬉しそうに見える祐志。

涼子 え、これ？

挿絵 川、工場の青、本当に空まで続いているじゃん！

■ みんなも橋の向こうから帰ってきて、

一面ブルーに光る川と工場を眺める。

祐志は原稿用紙を鞆から取り出して笑う。

挿絵は、消えていく。

M  
イン

完。